

## 定例研究会（例会）の創設

例会企画・運営委員長 大貫秀明

すでに2回の定例研究会（例会）が望外の成果をもたらして終えたことをまずはご報告させていただきます。舞踊研究に携わる多くの方々から肯定的なご意見をお寄せいただき、立ち上げに関わった者一同胸をなでおろしております。多少のタイムラグがありますが、ここに例会を創設するに至った経緯等を簡単ながら記させていただきます。

### 例会創設の背景

本学会は長きにわたり年2回、春と秋に大会を開催してまいりました。春は開催地を地方にもとめ、各地に所縁のある踊りを見学、語り、そして体験させていただき、秋は東京近辺にてパネル討論と一般研究発表の場を設けて研鑽に励んでまいりました。他の学会にはみられない、まことにユニークで、研究対象である舞踊の特性を心憎いほどに反映したものであったと思います。しかし、春の学会大会の企画がほぼ一巡した現在、その方式を継続する困難さを理事会構成員は痛切に感じはじめ、また、機を同じくして増えてきた一般研究発表希望者の数と発表時間の短さに対する不満を打開せざるをえない状況になりました。そこでそうした問題の一括打開策として考えられたのが今回の例会の創設なのです。

### 例会の目的と運営方法

目的については、上述にもありますように学会大会のあり方を改革するという面と、研究発表に意欲をみせてくださる会員諸賢のご要望にこたえるということに尽きます。ことに、研究発表に関しては発表時間、方法等について可能な限り拘束を解いたかたちで発表をしていただけることを実現しようと考えました。そうすることにより、会員の発表意欲もさらに高まり、延いては新たな会員の獲得に係わるインセンティブにもなろうと考えたわけです。

年2回の開催を3月と6月とし、3月は院生による修論・博論発表ならびに在外研究からお帰りの方々に研究の成果のご報告をいただく場として、また、6月は一般研究発表を広く募るとともに、時宜を得た研究課題を取り上げてのパネルなりレクデモを設定する場とすることにいたしました。人の手当て、限りある予算、割り当てることが許される時間の少なさといったことから、運営の実際にはインターネットを駆使せざるをえないことはご理解いただけるかと思えます。開催の告知、研究発表の募集・応募、採択通知、発表に係わるご質問と回答、レジュメの授受、それらはすべて

ネット上で処理していくことにいたしました。

### 経過報告 一第2回例会を終えて一

第1回の例会は3月15日（土）にお茶の水女子大学にて開催されました。6本の修論発表、4本の博論発表、そして3本の在外研究報告がなされました。（詳しくは、次頁以降に掲載されている概要をご覧ください。）修論、博論の発表にはそれぞれの発表内容に造詣の深い方々をコメンテーターとしてお招きし、鋭い指摘と温かい支援をいただきました。また、手話通訳者（情報保障者）を介しての発表・質疑応答という本学会が未経験なことも体験いたしました。在外研究報告3本はそれぞれ興味深いもので、アクチュアルな情報を参加者に提供していただきました。午前10時に開始され、終了したのが19時を過ぎるという、かなりハードな初回例会となってしまいましたが、なんとも言えぬ充足感を与えてくれました。

第2回例会は6月7日（土）に早稲田大学文学部にて開催されました。一般研究発表4本（40分発表が2本、30分発表が2本）が午前中に、そして午後には「舞踊の復元の試み 一歌舞伎の振付師その一、西川扇蔵一」と題して復元の実演を、また、舞踊復元における舞踊譜の可能性と限界についてパネル討論もおこなわれました。

第1回、第2回ともに参加者数は優に50名を超え、質疑応答では制限時間内でお受けできないほどのご質問・ご意見をいただきました。

### 今後の展望と課題

描きうる展望としては、満足のいく研究発表の場の確保はもちろんのこと、可能な限り学会大会（年末開催予定）との連携と補完性を堅持しつつも大会では実現が難しい内容を積極的に取り上げていきたいと考えています。他の学会との交流、学会ならではのワークショップの開催、国際交流などがその例として挙げられます。ともかく、オープンで魅力的な場を築きたいと考えております。春の大会を断念した代償として、そのくらいはせねばならぬ、と考えているわけです。

なお、課題として残されている事項のひとつに広報・連絡の手段があります。本学会員にはまだパソコンを使用しない方が少なくないことが大きなネックとなっております。強要すれば「テク・ハラ」ととらえられてしまいますゆえ、当座は辛抱あるのみだと思っております。

最後に、ご逝去された目代前会長にも本件については大所高所からご教訓いただきました。合掌